

変化し続ける企業だけが生き残る!

ポーターレスでめまぐるしく変化する昨今のビジネス環境のなかで、企業がその存在意義と市場競争力を保持し続けていくためには、顧客ニーズへの素早い対応や迅速な意思決定を可能にする継続的な改革が必要だ。そこで日経産業新聞フォーラム2010では「変化し続ける企業だけが生き残る!」(主催・日本経済新聞社、協賛・日本プロGRESS、住商情報システム)を開催。ビジネスの可視化や俊敏な変化対応力とこれを実現する情報システムの構築などについて、専門家が講演した。

基調講演

「激動時代の未来事業戦略——2010～20年代のビジネスチャンスとは?」



多摩大学名誉教授

星野 克美氏

未来学は1965年ごろ、アメリカで台頭した学問です。未来学者という人、ハーマン・カーン、ピーター・ドラッカー、アルビン・トフラーなどが有名です。私も40年以上、経済・経営の実証的研究を常に未来志向で進めてきました。「未来予知科学」という認知科学システムを開発し、経済、産業、経営の底流にあるトレンドを予測することに挑戦してきました。

そうした立場から、今後を果たしていきます。その世界経済を展望してみます。世界人口は2050年に90億～100億人に達する一方、日本は1億人に減ると予測されています。国内総生産(GDP)で減る時代が来るかもしれない。日本の人口は2100年に第2次大戦終戦時の6000万人に縮小します。人口減少によって市場も労働力も減少し、潜在成長力が限りなくゼロに近づくと予測されています。

世界経済の足元を見てみると、金融危機後の損失があまりにも大きく、脱出するのは簡単ではありません。石油や金属資源などの枯渇が懸念されています。

消化難の事態が来るかも。日本経済と日本市場はせいぜい弱と言わねばなりません。石油・資源がいつ枯渇するかは諸説ありますが、私は30年前後に「成長の臨界点」を迎えるという研究に注目しています。石油需要は先進国と新興国の需要が重なり合って膨張を続けています。石油に依存する産油国は、10～20年後のピークが引き下げられる可能性があります。気候変動の被害は世界GDP6000兆円の1.5%、90兆円に達する可能性があります。

もう一つの大きなリスクは地球温暖化で、二酸化炭素(CO2)の排出削減計画では20年ごろには削減率50%以上が必要とされています。CO2削減率50%以上が必要とされています。CO2削減率50%以上が必要とされています。



円は、長期的には5%ものぼると予測されています。食糧・水飢饉(ききん)を招き、難民を増やし、果ては戦争を引き起こす。CO2削減率50%以上が必要とされています。CO2削減率50%以上が必要とされています。

「ピンチの中にチャンス」を掴む、それが資本主義経済のエネルギーです。イノベーションと新興国の成長機会を生み出しています。新しい経済成長地帯としてアジア、中東、アフリカ、豪州、中南米のほか、海底資源が見込まれるカナダ・ロシア・北極などの北極海沿岸国のポテンシャルにも注目すべきです。

資源に恵まれない日本は産業構造をより高度化し、知識産業と海外進出で活路を見いだすべきです。産学協同でクリエティブ・クラスの人材を育成し、創造的破壊を持続することが成長・生存の秘策です。

セッション1

「ハイブリッドSOA基盤〜ビジネス変化に強いSOA」



住商情報システム
プラットフォームソリューション事業部
ミドルウェアソリューション部
青木 洋和氏

「SOA」することにより、費用対効果などの面で数回の高コストな利用方法になってしまっています。

ところが最近、クラウドコンピューティングの出現により、業務を部品化したサービスがネット上に提供されるようになりました。これにより業務の部品化という観点から、部品を選ぶという視点に切り替わり、コスト効率よくサービスを利用したり、提供されるサービスを借りられるようになったりしています。これが従来のSOAの考え方を覆す第1のポイントです。

第2のポイントは、統合基幹業務システム(ERP)のように閉ざされた業務システムが、ウェブサービスとしてオープンに提供されるようになったことです。これにより必要なときに必要なサービスを利用できるようになりました。

多様化する情報サービスの利用 柔軟に伝えるシステム基盤提供

第3のポイントは既存システムです。既存システムの機能についても部品化し、サービスとして利用するというのが考え方に変わってきています。

このように、これまで悩まされていた部品化が非常に



日本プロGRESS 技術本部本部長

横川 健氏

セッション2

「自社ビジネスの見える化と継続的なビジネスプロセスの改善」

約5000億円を売り上げています。フォーチュン100の9割が顧客というように、多くの業界のお客様にソリューションを提供しています。

日本法人の日本プロGRESSは2008年にそれまで

拡張が可能②サービスをリアルタイムに監視でき、メッセージの永続性や多重送信を制御可能③クラウドサンク機能で業務トランザクション量の増加に柔軟に対応——などがあり、特許技術(CAA)による連続可用性でSOA基盤として高い信頼性を確保しています。

このようにサービスの利用形態は多様化し、システム環境は複雑化しています。Sonice ESBはそうした複雑な環境にも柔軟に対応できるSOA基盤です。このSonice ESBを中心として、クラウドやERPなどのパッケージ、既存システム群などを含めてシステムを構成する考え方を「ハイブリッドSOA」と呼んでいます。

住商情報システムはこうした優れた製品と長年のシステム構築で培ってきた知識と経験を元に、「つながる」をキーワードに連携基盤ビジネスを展開しています。めまぐるしいビジネスの変化にも強いSOAの実現を全社挙げてサポートしています。

RPMSの活用で低コスト化し、CAA機能で止まらない連携基盤を実現しました。また、あるメーカーは複数の海外生産拠点と本社とのERPを連携する、信頼性の高い基盤を構築しました。

ここで、ビジネスのリアルタイムな可視化、状況の即座の把握と迅速な対応、継続的なビジネスプロセスの改善というRPMSプラットフォームの特徴を生んでいます。

3社あった関連会社を統合して設立されました。従来はメインフレームから始まり、クライアント・サーバー、ウェブベースあるいはSOA、イベント駆動型アーキテクチャー(EDA)といったビジネスア

ソリューションが「RPM(レスポンス・プロセス・マネジメント)・スライム」で、日々刻々と変わるビジネスへの即応力を実現するためのITアクセスラターとしての役割を果たしています。

リアルタイムに情報を把握して顧客にきくというサービスを提供するなどの重要性を認識しています。それができなければ、他社との競争に勝ち抜いていけないというところから始まります。

RPMSは①ビジネスプロセス間のメッセージの流れを管理するActiional②高速イベント処理エンジンApama③プロセス分析・評価機能を持つBPMエンジンSavision——という3つの製品から構成されます。これらの製品の特徴を生かす

リアルタイムに情報を活用 変化に即応しビジネス拡大

アプリケーションごとに、その基盤となるソフトウェアを提供してきました。今後はソリューションに焦点を当て、顧客支援を強化していきたいと考えています。

この十数年間、ビジネスのスピードは飛躍的に速まりました。企業はこれに追いつき、めまぐるしく変わる状況に即応できる能力が求められています。

調査会社の報告によれば、ほとんどの企業がリアルタイムに情報を活用して、変化に即応しビジネス拡大

RPMSは①ビジネスプロセス間のメッセージの流れを管理するActiional②高速イベント処理エンジンApama③プロセス分析・評価機能を持つBPMエンジンSavision——という3つの製品から構成されます。これらの製品の特徴を生かす

広告

企画・制作
日本経済新聞社クロスメディア営業局